

経営のヒント212 「人の為に」が「自分の為に」なる！

「資本主義の根幹を支えるのは利己的欲望ではなく、与える行為である」

経済学者のジョージ・ギルダーは、上記のように言った。

この世で一番幸せなのは、他社のために時間を費やしてきた人々である

この世で最も不幸なのは、どうすれば自分が幸せになれるかだけを思い悩む人々である。

著名な精神科医のカール・メニンガ は「外に飛び出して、苦しんでいる人に手を差し伸べることこそ、孤独と不幸を乗り越える一番の近道だと言う

利他の心」が、結局は人の心を動かし、自分自身をも助けるのだ。

「自尊感情」をくすぐれ

アメリカの哲学者ウイリアム・ジェームズは、「人は誰しも認められたい」とい**欲求を持つ**」と喝破した。

人は誰しも「価値ある存在」として扱われたいと願っている。

無視されたり 1 人の自立した個人として見なされなかったりすれば誰もが自尊感情をひどく傷つけられるだろう

逆に、相手を「**価値ある存在**」として認めることで自尊感情をくすぐれば、好意や自信、高いモチベーションを引き出すことができるのだ。

「相手の立場に立つ」から共感を得られる

選挙活動で初めて演説に臨んだ 1 人の若い政治家の話がある。

彼は大勢の人に自分をアピールしたと張り切っていたが、いざ縁台に立ってみると目の前には男が 1 人座っているだけだった。

少し待ってはみたものの、他に人が現れる気配はない。

彼は諦めて男に言った。

「私は駆け出しの政治家です。この状況でも演説した方がいいと思いますか？ それとも中止した方がいいでしょうか？」

男は少し考えてからこう答えた。

「自分はただの牛飼いで、牛のことしかわからねえです。でも牧場に牛が一頭しか来なくても、干し草を出して食わせてやりますよ」

牛飼いの言葉に励まされ、若き政治家は演説を始めた。

無表情で座る牛飼いを前に、彼は二時間にわたって延々と話し続けた。

演説を終えると、政治家は牛飼いに感想を求めた。

牛飼いは言った。

「自分は牛飼いだから、牛の事しかわかりません。でも、牧場に干し草の山を持って行っても、一頭しか来なかったら全部はやらねえですよ」

このエピソードには二つの教訓がある。

1 つは、多くの人に自分を認めてもらいたかったら、自分が 1 人ひとりを認めることから始めなくてはいいということ。

そしてもう 1 つは、相手の立場を理解して話をしなければ、人は「認められている」とは絶対感じないということである。

<経営のヒント>

人は誰でも「認められたい」とい**自尊感情**があるのだが、自分自身の日頃の行動はどうだろうか？
価値ある存在をいうことを常に意識しているだろうか？ とっても考えさせられました！